

〈論文〉

ユーモアスタイルに関する日中比較の予備的検討¹

Preliminary Study on the Comparison of Humor Styles Between Japan and China

林 萍萍

Pingping LIN

I はじめに

円滑なコミュニケーションを行うため、人が自分および他人の face（面子）を保持したり、自分の face（面子）が脅かされることを防いだり、失われた自分の face を取り戻そうと努めたりする (Goffman, 1967)。面子は日本人 (穴田, 1985) と中国人 (Smith, 1894; Lin, 1936; 江, 2000) にとって非常に重要な行動原理であることが、多くの研究者により指摘されてきた。面子の定義については、言語学、社会学、心理学などのアプローチにより検討されてきたが、いまだに研究成果は統一されていないと指摘されている (趙, 2013)。一方、心理学的視点においては、面子は他者に見せる公的・自己イメージとして捉えられている点は、研究者の間には一貫している (例えば、陳, 1988; Lim, 1994; 末田, 1998)。林 (2018, 2019, 2020, 2022) は、日本人と中国人の面子喪失、面子維持、面子共有などの面子行為について、一連の研究を行ってきた。

林 (2019) では、質問紙調査により、日本人と中国人の大学生が、自分の面子を失ったと感じた時に、どのように自分の面子を回復させようとするのかを検討した。具体的には、「駅で転んだ」「先生に晒された」「意見が否定された」「嘘がバレた」「依頼を遂行できなかった」の 5 場面に対して、ネガティブ感情 (悲しみ、恥じらい、怒り、面子喪失) をどの程度で感じるかを 4 段階で評定してもらい、自分の失った面子を少しでも回復するために、「偽装」「譲歩」「自己防衛」「感情表出」「攻撃」「第三者協力」「謝罪」「冷静維持」「意見統合」「逃走」「笑ってごまかす」「言い訳」「ユーモア」「正当化」「否認」という 15 種類の面子回復行為をどの程度使用する可能性があるかについて 4 段階で評定してもらった。分析の結果、中国人は日本人に比べて、意見統合、言い訳、ユーモアをより多く使用するのに対して、日本人は中国人と比べ、笑ってごまかすことをより多く使用することがわかった。また、15 種類の面子回復行為について因子分析を行った結果、含まれる項目は完全に一致していないが、日中とも「逃走・回避」「自己主張」「問題解決」の 3 つの因子が抽出された。また、同じ下位因子に含まれる項目に日中間で多くの共通点がみられる一方、相違点もみられ、「ジョークやユーモアを使う」という項目は、日本人では「逃走・回避」因子に含まれ、中国人では、「問題解決」に含まれることがわかった。

このように、日本と中国では、ユーモアの対人関係における働きが異なるかもしれない。ところが、

1 本稿は日本感情心理学会第 28 回大会で発表した結果をもとに、論文として再構成したものである。

同研究では、ユーモアのスタイルを細かく分けずに「ユーモア」という表現を使用した。日中間でみられたユーモア使用の文化差は、日本人と中国人がイメージしているユーモアの中身による違いが生み出しているのかもしれない。また、果たしてユーモアの使用は、面子喪失の回避につながるのだろうか。

本研究では、ユーモアスタイルに焦点をあて、日本人と中国人は日常生活においてどのようなユーモアスタイルをどの程度で用いるのか、ユーモアスタイルと面子欲求、承認欲求などとの関連を検討する。

II ユーモアスタイルに関する先行研究

以下では、ユーモアの定義、ユーモアスタイルの測定およびユーモアスタイルの文化比較に関する先行研究をレビューする。

ユーモアの定義・分類について

ユーモアの定義と分類は多岐にわたって検討されてきた。以下には、主な定義と分類について概観する。

上野（1992）は、ユーモアを「おかしさ」「おもしろさ」という心的現象を示すものと定義し、ユーモア現象に関する研究を概観した上で、ユーモアを、自己や他者を楽しませる「遊戯的ユーモア」、自分や他者を攻撃する「攻撃的ユーモア」、自分や他者を励まし、許し、心を落ち着かせる「支援的ユーモア」の3つに分類することを提案している。

牧野（1997）は、上野のユーモアの分類（1992）を「ユーモア刺激の性質（遊戯的・攻撃的）」と「支援的機能の有無」の2つの軸に再分類し、ユーモアを、具体的には「送り手が受け手（とくには、送り手自身も含む）を楽しませる目的で作りに出した刺激を受け手に伝達し、当事者（送り手かつ/あるいは受け手）がその刺激を面白い、おかしいと知覚する一連の過程」と操作的に定義し、この過程には、刺激の特性としてのユーモア（ユーモア刺激）と受け手の知覚反応としてのユーモア（ユーモア反応）が含まれると主張している。

Martin（2007）は、ユーモアを「滑稽と思われたり、人の笑いを誘うと考えられるような話や行動、そのようなおかしな刺激を創造し理解する心的過程、そしてその楽しみにおける感情的な反応などのすべて」と広義に定義している。

ユーモアスタイルの測定

ユーモアの測定について、これまで、それぞれの研究者が、自らが定義するユーモアを測定するために様々な尺度を作成した。本研究では、文化比較研究においても広く使用されている Martin らの尺度を具体的に紹介する。Martin et al.（2003）は、ユーモアの使用の個人差を測定するために、ユーモアスタイル質問紙（Humor Style Questionnaire）を開発した。同ユーモアスタイル質問紙は4つの下位因子があり、それぞれの下位因子には8項目が含まれ、計32項目から構成されている。同研究では、ユーモアは適応的ユーモア（Adaptive Humor Styles）と非適応的ユーモア（Maladaptive Humor Style）に分けることができ、適応的ユーモアはさらに「親和的ユーモア」と「自己高揚的ユーモア」に、非適応的ユーモアはさらに「攻撃的ユーモア」と「自虐的ユーモア」に分けることができ

ると指摘している。

親和的ユーモア (affiliative humor) は、他人と冗談を言ったり、面白い話をしたり、他人を楽しませることに関連する項目が含まれており、肯定的な対人関係を促進する機能をもっている。例えば、「仲の良い友達と大いに笑ったり冗談を言いあったりする」「人を笑わせることは、楽しい」などの項目である。

自己高揚的ユーモア (self-enhancing humor) は、視点取得的ユーモア (perspective-taking humor)、ユーモラスな人生観を維持する傾向、感情の調節と対処におけるユーモアの使用に関連する項目が含まれており、自分の well-being にポジティブな影響を与える機能をもっている。例えば、「落ち込んでいる時、たいていユーモアで自分の気持ちを励ますことができる」「ひとりではじめな気分の中には、何か面白い事を考えて自分を元気づけようとする」などの項目である。

攻撃的ユーモア (aggressive humor) は、皮肉、からかい、他人を批判または操作するためのユーモアの使用、他人への影響を考慮しない強迫的なユーモアの表現に関する項目が含まれている。例えば、「嫌いな人がいたら、しばしばユーモアやからかいでその人を攻撃する」「人がミスをしたら、よくそれをからかう」などの項目である。

自虐的ユーモア (self-defeating humor) は、ユーモアを過度に自己卑下や相手を喜ばせるために使う傾向、他人のジョークのネタにされることを許容する傾向、根本的な否定感情を隠すための防衛的な否定の形式としてユーモアを使う傾向に関するものである。例えば、「しばしば自分の短所やドジ、失敗を笑い話にして、人から好かれようとしたり、受け入れてもらおうとする」「必要以上に自分をネタにして、人を笑わせたり面白がらせる」などの項目が含まれている。

ユーモアスタイルに関する文化比較

ユーモアは多くの人が日常的に何度も経験するという人間の普遍的な活動であり、ユーモアの使い方や適切な場面は文化の影響を受けている (Martin & Ford, 2018)。

これまでの研究では、東アジア文化圏と西洋文化圏において、ユーモアに対する認知とユーモアの使用について、相違点があることが報告されている (陳 & Martin, 2005; Chen & Martin, 2007)。西洋文化において、ユーモアは恐怖と不安を解放するための方略としてだけでなく、人々の内なる恐怖に対して、怖くなく、面白いという視点を提供するとして、ポジティブに捉えられることが多い (Martin & Ford, 2018)。一方、東洋文化において、とくに中国のような儒教文化では、ユーモアは必ずしも肯定的に評価されないことが指摘されている。具体的には、中国人の自己実現は、制約と真面目さを重視する一方で、ユーモアを否定する傾向がある (Bond, 1996; Liao, 2007; Yue, 2010)。Yue et al.(2016)は、カナダ人が中国人よりもユーモアを重視していることを報告している。また、西洋人と比べて、中国本土、台湾、香港の人々を含む東アジア人は、自身のユーモアのセンスを低く評価していることが一貫して確認されている (例えば、陳 & Martin, 2005; Chen & Martin, 2007)。

また、ユーモアに対する評価および認識だけではなく、ユーモアの使用の文化差も繰り返し報告されている。

Kazarian & Martin (2006) は、4種類のユーモアの使い分けと文化との関係を、特定の文化的側面から系統的に検討するために、レバノン人、カナダ人、ベルギー人のユーモアの使い方を比較したところ、以下に述べることがわかった。調和と集団の凝集力を重視する水平的集団主義文化の人々は、親和的ユーモアを使う傾向があり、集団のための自己犠牲を重視する垂直的集団主義文化の人々は、

自虐的ユーモアを使う傾向がある。また、競争原理を受容する垂直的個人主義文化圏の個人は、自分の階層的地位を高めるために攻撃的ユーモアを用いる傾向がある。さらに、親和的ユーモアは様々な文化的志向では同程度で使われる。

また、Schermer et al. (2019) では、21 種類の言語を含む 28 カ国²の個人 8361 名を対象に、ユーモアスタイル尺度 (Martin et al., 2003) を用いて、各文化間のユーモアスタイルの違いを調べたところ、いずれの文化においても、親和的ユーモアの得点が最も高く、次いで自己高揚的ユーモア、自虐的ユーモア、攻撃的ユーモアが続くことがわかった。また、日本の結果に着目すると、他の文化と比べ、日本では、自己高揚的ユーモアが低い水準、自虐的ユーモアが高い水準にあるという特徴がみられた。

Chen & Martin (2007) は、中国人大学生 354 名を対象に、Martin et al. (2003) のユーモアスタイル尺度を用いて検討したところ、先行研究と同様に、中国人においてもユーモアスタイルの 4 因子が得られ、信頼性と妥当性が確認されている。また、同研究では、中国人大学生の結果を 388 名のカナダ人大学生の結果と比較したところ、いずれのユーモアスタイルにおいても、カナダ人大学生と比べ、中国人大学生のほうが得点が低く、特に攻撃的ユーモアにおいては差が大きいことがわかり、カナダ人のほうが、日常生活において、それぞれのユーモアをより使用する傾向があることが示唆された。

Hiranandani & Yue (2014) は、インドの大学生 102 名と香港の大学生 101 名を対象に調べたところ、インド人と香港人の両方とも、親和的ユーモアと自己高揚的ユーモアをより多く使うこと、インド人は香港人よりも親和的ユーモアと自己高揚的ユーモアを使っていることを報告している。

一方、東アジア文化内の異なる文化における違いまたは、同じ文化における地域差も検討されてきた。岳他 (2010) は、香港の大学生 300 名と中国大陸の大学生 500 名を対象に、Martin et al. (2003) のユーモアスタイル尺度を用いて検討したところ、中国大陸の大学生と香港の大学生の両方とも、親和的ユーモアをより多く使用し、自虐的ユーモアをあまり使用しない傾向があること、中国大陸の大学生は自己高揚的ユーモアをより多く使用するのに対して、香港の大学生は攻撃的ユーモアをより多く使用することがわかった。これは、香港のバイカルチャーという背景が、儒教や集団主義の影響力を弱めているためと考えられている。

さらに、特定のユーモアスタイルは文化によって異なる意味合いをもっており、それが異なる文化的文脈でユーモアがどのように使われるかに影響を与える可能性があるという指摘されている。例えば、Chen & Martin (2007) は、中国人が「問題を抱えたり落ち込んでいる時、自分の本当の気持ちを親しい人にも知られないように、ふざけることがよくある」という項目を、カナダ人のように自虐的ユーモアではなく、自己高揚的ユーモアと捉えることを報告している。このことは、中国人にとって、自分の問題を隠すためにユーモアを使うことは、自虐的な方略よりも自己高揚の方略であることを示しており、面子を保つことが中国人の性格にとって最も重要な特性の一つであることにも起因すると考えられる (Yue, 2011)。

上述したように、これまでのユーモアスタイルに関する文化比較は、主に東洋と西洋の文化の間で行われてきた。同じ文化圏内での比較がまだ十分に行われていない。本研究では、Martin et al. (2003) のユーモアスタイル尺度を用いて、日本人と中国人のユーモアスタイルを比較検討する。

2 28 カ 国 : Bosnia & Herzegovina, Brazil, Bulgaria, Canada, Chile, Colombia, Croatia, Estonia, Germany, Hungary, Indonesia, Iran, Japan, Latvia, Malaysia, Pakistan, Poland, Portugal, South Africa, Romania, Russia, Serbia, South Korea Korean, Spain, Turkey, Ukraine, United States, Vietnam.

III 方法

調査協力者 20代～50代の日本人128名（男性61名、女性66名、不明1名；平均年齢32.8歳、標準偏差9.55）と中国人155名（男性91名、女性64名；平均年齢32.2歳、標準偏差5.76）が調査協力者となった。

質問紙 ユーモアスタイル尺度32項目（日本語版：吉田，2012；中国語版：岳他，2010）、面子欲求尺度11項目（Zhang et al., 2011）、文化的自己観尺度12項目（Singelis, 1994）、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度18項目（小島他，2003）、自尊心尺度10項目（Rosenberg, 1965）を用いた。ユーモアスタイル尺度、面子欲求尺度と文化的自己観尺度は7件法で、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度と自尊心尺度は5件法で評定させた。

手続き 日本人には、Google Formで作成したアンケートのリンク先を回答者に送付し、回答してもらった。中国人には「問巻星」というウェブサイト上で作成し、同じ方法で回答を求めた。実施時期は2020年3月であった。

IV 結果

各尺度の因子構造

本研究の統計分析にはHAD ver.17.202（清水，2016）を使用した。本研究で用いるいずれの尺度も、先行研究において、日本人および中国人に適用できることが確認されている。

ユーモアスタイル尺度について、先行研究と同じような因子構造が得られるかどうかを検討するために、日本人と中国人のデータをまとめて探索的因子分析を行った。因子負荷量が極めて低い4項目（「さほど無理せず人を笑わせることができる一私はもともと面白みのある人間のようなだ」「冗談を言ったり滑稽な話をしている時、人がそれをどんな風を感じているかはあまり気にしない」「悲しい時や、気が動転している時には、ユーモアのセンスを失う」「友達や家族といると、しばしば私は冗談やからかいの対象として見られているようだ」）を削除した上で、再度探索的因子分析を行ったところ、先行研究と同様に4つの因子が得られた。

第1因子は「自己高揚的ユーモア」であり、第2因子は「自虐的ユーモア」であり、第3因子は「親和的ユーモア」であり、第4因子は「攻撃的ユーモア」であった。4因子による累積寄与率は40.55%であり、内的整合性による信頼性係数（ α ）は第1因子が $\alpha = .78$ 、第2因子が $\alpha = .74$ 、第3因子が $\alpha = .77$ 、第4因子が $\alpha = .65$ であった。第4因子の信頼性係数がやや低かった。

表1 ユーモアスタイル尺度の因子構造

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	
第1因子：自己高揚的ユーモア；$\alpha = .78$					
18ひとりでのみじめな気分の中には、何か面白い事を考えて自分を元気づけようとする。	.74	-.01	.03	-.07	
10混乱したりみじめな時でも、たいてい、状況について何らかの滑稽な点を見い出して、自分の気持ちを楽にしようとする。	.68	.08	-.02	-.02	
2落ち込んでいる時、たいていユーモアで自分の気持ちを励ますことができる。	.67	-.04	.25	.06	
14人生をユーモラスにとらえているので、必要以上に心が乱れたり、落ち込んだりすることがない。	.64	-.16	.16	.03	
26私の経験から言って、困難に対処する上で、状況の愉快的な面を考えることは、非常に効果的であることが多い。	.58	-.01	-.14	-.25	
6一人の時でも、人生の馬鹿馬鹿しさに、可笑しい気持ちにさせられることがよくある。	.45	.06	-.03	.12	
30愉快になるのに人と一緒にでなくとも良い—たいてい一人でいても笑える事を見つけることができる。	.34	.09	-.07	-.04	
第2因子：自虐的ユーモア；$\alpha = .74$					
20冗談を言ったり、面白く見せようとしている時、しばしば自分をコケにしすぎる。	-.07	.85	-.10	-.04	
8自分をコケにして友達や家族の笑いをとれると、しばしばやりすぎてしまう。	.02	.71	-.11	-.02	
4必要以上に自分をネタにして、人を笑わせたり面白がらせる。	-.09	.63	.12	.06	
12しばしば自分の短所やドジ、失敗を笑い話にして、人から好かれようしたり、受け入れてもらおうとする。	.11	.57	.14	.02	
32友達や、家族とうまくやっていく私のやり方は、自分を笑いものにするのである。	.22	.36	.04	.01	
16あまり自分が滑稽に思われるような話はしない。_v	-.17	.33	.27	-.02	
28問題を抱えたり落ち込んでいる時、自分の本当の気持ちを親しい人にも知られないように、ふざけることがよくある。	.25	.31	-.05	-.06	
第3因子：親和的ユーモア；$\alpha = .77$					
1ふだんは人と一緒に笑ったり冗談を言いつたりはしない。_v	.00	-.08	.75	-.11	
17ふだんは人に冗談を言ったり面白がらせることを好まない。_v	-.01	-.04	.73	.08	
25友達と冗談を言いつたりはあまりない。_v	-.43	.06	.62	.08	
9自分についての面白い話をして人を笑わせることはめったにない。_v	.03	.13	.50	-.09	
13仲の良い友達と大いに笑ったり冗談を言いつたりする。	.31	.02	.50	-.03	
29普段、人と一緒にの時、面白い話を言おうとしてもなかなか思いつかない。_v	.27	-.20	.45	.13	
21人を笑わせることは、楽しい。	.10	.32	.44	-.11	
第4因子：攻撃的ユーモア；$\alpha = .65$					
3人がミスをしたら、よくそれをからかう。	.09	.14	-.01	.62	
27嫌いな人がいたら、しばしばユーモアやからかいでその人を攻撃する。	.14	.13	-.19	.53	
23友達全員が、誰かのことをからかっていても、それには加わらない。_v	-.17	-.16	.04	.49	
7自分のユーモアのセンスを使って、誰かを攻撃したり、傷つけたりすることはない。_v	-.02	-.18	-.11	.46	
15誰かを非難したり、こき下ろしたりする手段として、ユーモアを使うのは、好まない。_v	-.11	.02	.07	.40	
31誰かの気分を害するような冗談は、どんなに面白くても、言わないし笑わない。_v	-.08	.03	.06	.38	
19おもしろい話を思いつくと、その場に合わない話でも、どうしても、喋ってしまうことがある。	.27	.23	.00	.33	
	因子寄与	3.39	3.13	2.91	1.92
	累積寄与率	12.09%	23.29%	33.70%	40.55%

※ _v がつく項目は逆転項目である。

面子欲求尺度については、林（2018）と林（2022）では、日本人と中国人の大学生および社会人を対象とした調査において信頼性が確認されている。本研究では、先行研究にならい、確証的因子分析を行い、因子負荷量が極めて低い1項目（「評判の良くない会社に勤めるならば、そのことを他の人に言われぬように努める」）を除いて、再度確証的因子分析を行った（表2）。第1因子は「面子獲得欲求」であり、第2因子は「面子喪失回避」であり、2因子による累積寄与率は51.75%であり、内的整合性による信頼性係数（ α ）は第1因子が $\alpha = .78$ 、第2因子が $\alpha = .66$ であった。第2因子の信頼性係数がやや低かった。

表2 面子欲求尺度の因子構造

項目	Factor1	Factor2
第1因子: 面子獲得欲求; $\alpha = .78$		
3他の人が望むかつ持っていないものを所有したい。	.76	-.15
6他の人から見ても、他の人より良い生活を送りたい。	.59	.13
11賞賛を得ることは私にとって重要である。	.58	-.01
1他の人の知らないことを話せるようになりたい。	.56	-.11
9他の人から、私が他の人のできないことができると思われたい。	.56	.13
4有名人と付き合いがあることを人に知られたい。	.54	.09
第2因子: 面子喪失回避欲求; $\alpha = .66$		
8他の人の前で、自分の欠点を隠すために必死である。	-.04	.97
5自分の弱みについて話すことを常に避けている。	-.12	.56
7本当にそうだとすると、私が教養のない人間であると他の人に思わせないように努める。	.19	.50
10自分が本当に悪いときでも、相手の前で謝らない。	.00	.31
因子寄与	2.78	2.39
累積寄与率	27.81%	51.75%

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度については、林（2022）では、日本人と中国人の社会人を対象とした調査において信頼性が確認されている。本研究では、先行研究にならい、確証的因子分析を行った（表3）。第1因子は、他者から肯定的な評価を獲得しようとする「賞賛獲得欲求」と、第2因子は他者の否定的評価を回避しようとする「拒否回避欲求」であり、2因子による累積寄与率は40.72%であり、内的整合性による信頼性係数（ α ）は第1因子が $\alpha = .86$ 、第2因子が $\alpha = .78$ であった。

表3 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の因子構造

項目	Factor1	Factor2
第1因子: 賞賛獲得欲求; $\alpha = .86$		
6大勢の人が集まる場では、自分を目立たせようとはりきる方だ。	.75	-.18
5自分が注目されていないと、つい人の気を引きたくなる。	.72	.06
7人と仕事をするとき、自分のよい点を知ってもらうようにはりきる。	.70	.01
16高い信頼を得るため、自分の能力を積極的にアピールしたい。	.68	.02
13責任ある立場につくのは、皆に自分を印象づけるチャンスだ。	.63	-.07
9目上の人から一目おかれるため、チャンスは有効に使いたい。	.62	.08
3人と話すときにできるだけ自分の存在をアピールする。	.60	.02
4初対面の人にはまず自分の魅力を印象付けようとする。	.60	-.01
18皆から注目され、愛される有名人になりたいと思うことがある。	.47	.17
第2因子: 拒否回避欲求; $\alpha = .78$		
2意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になる。	-.10	.67
11自分の意見が少しでも批判されるところたえてしまう。	-.05	.66
8目立つ行動をとるとき、周囲から変な目で見られないか気になる。	-.04	.65
15優れた人々の中にいると、自分だけが孤立していないか気になる。	.05	.64
14場違いなことをして笑われないよう、いつも気を配る。	.01	.62
10不愉快な表情をされると、あわてて相手の機嫌をとる方だ。	.14	.44
1相手との関係がまずくなりそうな議論はできるだけ避けたい。	.02	.32
17人から敵視されないよう、人間関係には気を付ける。	.23	.30
因子寄与	4.23	3.10
累積寄与率	23.52%	40.72%

文化的自己観尺度についても同様に確証的因子分析を行ったところ、2因子が得られた。第1因子は「相互協調的自己」であり、第2因子は「相互独立的自己」であり、2因子による累積寄与率は36.81%であり、内的整合性による信頼性係数(α)は第1因子が $\alpha = .78$ 、第2因子が $\alpha = .59$ 、第2因子の信頼性係数がやや低かった。

表4 文化的自己観尺度の因子構造

項目	Factor1	Factor2
第1因子: 相互協調的自己; $\alpha = .78$		
9自分の幸福は周りの人に左右される。	.70	-.22
8自分自身の業績よりも対人関係のほうが大切だと思う。	.70	-.03
12仲間と協調していくことが自分にとって大切である。	.67	.22
11仲間が決めたことを尊重することは大切である。	.60	-.01
10自分は楽しくなくとも、仲間が自分を必要とするならば一緒にいる。	.52	-.17
7他人と協力して何かをすることは気持ちがいい。	.51	.28
第2因子: 相互独立的自己; $\alpha = .59$		
5誤解されるより、イヤならイヤとはっきり言う。	-.07	.66
4一人の独立した人間として振舞うことは、私にとって重要ではない。	.07	.48
6他人と関係なく、自分が自分であることが大切である。	-.10	.44
1多くの面で他人と違い、ユニークであることを好む。	-.02	.44
3他人が何と言おうとも、自分のしたいようにする。	-.23	.38
2年上の人に対しても初対面でざっくばらんに話ができる。	.14	.31
	因子寄与	2.59
	累積寄与率	21.62%
		1.82
		36.81%

自尊心尺度の10項目について、逆転項目(「敗北者だと思ふことがよくある」「自分には、自慢できるところがあまりない」「自分は全くダメな人間だと思ふことがある」「何かにつけて、自分が役に立たない人間だと思ふ」)の得点を変換した上で因子分析を行ったところ、1因子のみが抽出された。因子負荷量が極めて低い項目(「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」)を削除した。因子寄与率は40.45%であり、内的整合性による信頼性係数(α)は.75であった(表5)。

表5 自尊心尺度の因子構造

項目	Factor1
7だいたいにおいて、自分に満足している。	.72
3敗北者だと思ふことがよくある。_v	.72
6自分に対して肯定的である。	.68
5自分には、自慢できるところがあまりない。_v	.67
9自分は全くダメな人間だと思ふことがある。_v	.66
1少なくとも人並には、価値のある人間である。	.66
10何かにつけて、自分が役に立たない人間だと思ふ。_v	.65
2いろいろな良い素質をもっている。	.65
4物事を人並みには、うまくやれる。	.62
	因子寄与
	4.04
	累積寄与率
	40.45%
	α 係数
	.75

※_vがつく項目は逆転項目である。

各下位尺度間の相関関係と下位尺度得点

以上、各尺度ともほぼ十分な信頼性が得られた。各尺度の下位尺度の得点を求めた上で、各下位因子間の偏相関係数を求めた。

まず、日本人の結果について述べる。ユーモアスタイル尺度の下位尺度間の関連について、「自己高揚的ユーモア」と「自虐的ユーモア」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .26$)、「自己高揚的ユーモア」と「攻撃的ユーモア」の間には有意な負の相関 ($r_{偏} = -.19$)、「自虐的ユーモア」と「攻撃的ユーモア」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .44$) がみられた。

ユーモアスタイルと面子欲求の関連については、「親和的ユーモア」と「面子喪失回避欲求」との間には有意な負の相関 ($r_{偏} = -.26$)、「攻撃的ユーモア」と「面子喪失回避欲求」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .16$) がみられた。

ユーモアスタイルと承認欲求の関連については、「親和的ユーモア」と「賞賛獲得欲求」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .29$)、「攻撃的ユーモア」と「拒否回避欲求」の間には有意な負の相関 ($r_{偏} = -.20$) がみられた。

ユーモアスタイルと文化的自己観の関連については、「自虐的ユーモア」と「相互協調的自己」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .21$)、「攻撃的ユーモア」と「相互協調的自己」の間には有意な負の相関 ($r_{偏} = -.32$)、「自己高揚的自己」と「相互独立的自己」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .22$) がみられた。

ユーモアスタイルと自尊心の関連については、「自己高揚的ユーモア」 ($r_{偏} = .23$) および「攻撃的ユーモア」 ($r_{偏} = .17$) と「自尊心」の間には有意な正の相関、「自虐的ユーモア」と「自尊心」の間には有意な負の相関 ($r_{偏} = -.25$) がみられた (表6)。

表6 各下位尺度間の偏相関関係 (日本人)

	親和的 ユーモア	自己高揚 的ユーモア	自虐的 ユーモア	攻撃的 ユーモア	面子獲得 欲求	面子喪失 回避欲求	賞賛獲 得欲求	拒否回 避欲求	相互協調 的自己	相互独立 的自己	自尊 心
親和的ユーモア	—										
自己高揚的ユーモア	0.03	—									
自虐的ユーモア	0.08	0.26 **	—								
攻撃的ユーモア	-0.02	-0.19 *	0.44 **	—							
面子獲得欲求	-0.06	0.00	0.04	-0.01	—						
面子喪失回避欲求	-0.26 **	0.03	-0.03	0.16 *	0.37 **	—					
賞賛獲得欲求	0.29 **	0.13	0.01	0.10	0.31 **	0.25 **	—				
拒否回避欲求	-0.03	-0.12	0.14	-0.20 *	0.10	0.22 **	0.20 *	—			
相互協調的自己	0.11	0.12	0.21 **	-0.32 **	0.04	-0.02	0.21 *	0.06	—		
相互独立的自己	-0.05	0.22 **	-0.12	0.03	0.09	-0.21 *	0.07	0.07	0.17 *	—	
自尊心	0.04	0.23 **	-0.25 **	0.17 *	0.09	-0.06	0.13	-0.34 **	0.05	0.01	—

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

次は、中国人の結果について述べる。まず、ユーモアスタイル尺度の下位尺度間の関連について、「親和的ユーモア」と「自虐的ユーモア」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .42$)、「自己高揚的ユーモア」と「自虐的ユーモア」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .35$)、「自虐的ユーモア」と「攻撃的ユーモア」の間には有意な正の相関 ($r_{偏} = .22$) がみられた。

ユーモアスタイルと面子欲求の関連については、「攻撃的ユーモア」と「面子喪失回避欲求」の間には有意な正の相関 ($r_{\text{偏}} = .34$) がみられた。

ユーモアスタイルと承認欲求の関連については、「自己高揚的ユーモア」と「賞賛獲得欲求」の間には有意な正の相関 ($r_{\text{偏}} = .18$)、「自己高揚的ユーモア」と「拒否回避欲求」の間には有意な負の相関 ($r_{\text{偏}} = -.22$)、「自虐的ユーモア」と「拒否回避欲求」の間には有意な正の相関 ($r_{\text{偏}} = .22$) がみられた。

ユーモアスタイルと文化的自己観の関連については、「親和的ユーモア」と「相互協調的自己」の間には有意な正の相関 ($r_{\text{偏}} = .31$)、「攻撃的ユーモア」と「相互協調的自己」の間には有意な負の相関 ($r_{\text{偏}} = -.21$)、「自虐的ユーモア」と「相互独立的自己」の間には有意な正の相関 ($r_{\text{偏}} = .15$)、「攻撃的ユーモア」と「相互独立的自己」の間には有意な負の相関 ($r_{\text{偏}} = -.26$) がみられた。

ユーモアスタイルと自尊心の関連については、「親和的ユーモア」($r_{\text{偏}} = .25$) および「自己高揚的ユーモア」($r_{\text{偏}} = .34$) と「自尊心」の間には有意な正の相関、「自虐的ユーモア」と「自尊心」の間には有意な負の相関 ($r_{\text{偏}} = -.41$) がみられた (表7)。

表7 各下位尺度間の偏相関関係 (中国人)

	親和的 ユーモア	自己高揚 的ユーモア	自虐的 ユーモア	攻撃的 ユーモア	面子獲得 欲求	面子喪失 回避欲求	賞賛獲 得欲求	拒否回 避欲求	相互協調 的自己	相互独立 的自己	自尊心
親和的ユーモア	—										
自己高揚的ユーモア	-0.03	—									
自虐的ユーモア	0.42 **	0.35 **	—								
攻撃的ユーモア	-0.01	-0.01	0.22 *	—							
面子獲得欲求	0.05	-0.03	-0.04	-0.04	—						
面子喪失回避欲求	-0.16 +	-0.15 +	-0.13	0.34 **	0.26 *	—					
賞賛獲得欲求	0.10	0.18 *	0.02	0.16 +	0.58 **	-0.08	—				
拒否回避欲求	-0.03	-0.22 *	0.22 *	-0.17 +	0.23 *	0.20 *	0.17 +	—			
相互協調的自己	0.31 **	0.12	-0.13	-0.21 *	-0.30 *	0.18 *	0.27 *	0.31 *	—		
相互独立的自己	0.09	-0.01	0.15 *	-0.26 **	0.07	0.00	0.07	-0.12	-0.08	—	
自尊心	0.25 **	0.34 **	-0.41 **	0.13	0.06	-0.09	0.12	-0.23 *	0.09	0.27 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

次に、それぞれの尺度の下位尺度の得点の平均値をみてる。日本と中国において、どのユーモアスタイルが最も使われるのかを検討するために、ユーモアスタイルの得点を従属変数とし、ユーモアスタイルの種類を独立変数とした1要因分散分析を行ったところ、日本 ($F(3, 381)=108.85, p<.001$) と中国 ($F(3, 462)=98.18, p<.001$) のいずれにおいても、ユーモアスタイルの種類の主効果が有意であった。

日本では、多重比較を行った結果、それぞれのユーモアスタイルの間には、有意な差がみられ、「親和的ユーモア」の得点が最も高く、次いで「自己高揚的ユーモア」、「自虐的ユーモア」であり、「攻撃的ユーモア」の得点が最も低いことがわかった。

一方、中国では、多重比較を行った結果、それぞれのユーモアスタイルの間には、有意な差がみられ、

「自己高揚的ユーモア」の得点が最も高く、次いで「親和的ユーモア」、「自虐的ユーモア」であり、「攻撃的ユーモア」の得点が最も低いことがわかった。

また、それぞれのユーモアスタイルの得点について、日本と中国の間には有意な違いがあるのかを検討するために、*t*検定を行ったところ、自己高揚的ユーモア ($t(281) = -8.00, p < .01$) と攻撃的ユーモア ($t(281) = -2.87, p < .01$) の得点について、中国人は日本人よりも高く報告しており、親和的ユーモア ($t(281) = 3.92, p < .01$) の得点について、中国人は日本人よりも高く報告していることがわかった。一方、自虐的ユーモアの得点について、日本と中国の間には有意な違いがみられなかった(表8)。

本研究で使用した他の尺度の下位尺度の得点についても、*t*検定を行った。面子欲求尺度においては、面子喪失回避欲求の得点について、日本と中国の間には有意な違いがみられなかったが、面子獲得欲求の得点について、中国人は日本人よりも高く報告している ($t(281) = -5.60, p < .01$)。

承認欲求尺度において、拒否回避欲求の得点について、日本と中国の間には有意な違いがみられなかったが、賞賛獲得欲求の得点について、中国人は日本人よりも高く報告している ($t(281) = -9.57, p < .01$)。文化的自己観において、相互協調的自己 ($t(281) = -2.66, p < .01$) と相互独立的自己 ($t(281) = -9.96, p < .01$) のいずれも中国人は日本人よりも高いことがわかった。自尊心の得点において、日本人よりも中国人のほうが高く報告している ($t(281) = -4.61, p < .01$)。

表8 日本と中国における各尺度の下位尺度の得点の平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

	日本人		中国人		<i>t</i> 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
親和的ユーモア	4.68	1.16	4.17	1.03	3.92	**
自己高揚的ユーモア	3.65	0.95	4.60	1.03	-8.00	**
自虐的ユーモア	3.42	1.13	3.39	1.00	0.17	
攻撃的ユーモア	2.67	0.84	2.96	0.87	-2.87	**
面子獲得欲求	4.16	0.95	4.88	0.68	-5.60	**
面子喪失回避欲求	3.79	1.08	3.95	1.29	-1.11	
賞賛獲得欲求	2.64	0.75	3.47	0.71	-9.57	**
拒否回避欲求	3.63	0.74	3.73	0.65	-1.21	
相互協調的自己	4.65	1.02	4.98	1.04	-2.66	**
相互独立的自己	4.17	0.80	5.13	0.81	-9.96	**
自尊心	2.87	0.95	3.32	0.68	-4.61	**

** $p < .01$

V 考察

本研究では、Martin et al. (2003) の尺度を用い、日本人と中国人のユーモアスタイルを比較し、ユーモアスタイルと面子欲求、承認欲求、文化的自己観および自尊心との関連を検討した。以下には、本研究から得られた結果、おもに日本と中国の違いについて考察する。

親和的ユーモアをより好む日本人と自己高揚的ユーモアをより好む中国人

本研究では、日本人は親和的ユーモアを、中国人は自己高揚的ユーモアを最も多く使用すること、日本人は中国人よりも親和的ユーモアを、中国人は日本人よりも自己高揚的ユーモアをよく使うことが示唆された。

まず、文化内における4種類のユーモアスタイルの使用傾向について、日本人の結果は、先行研究で得られた知見と一致している。前述した28カ国の個人を対象とした研究 (Schermer et al., 2019) では、いずれの文化においても、親和的ユーモアの得点が最も高いことが報告されている。このように、多くの文化では、親和的ユーモアが最も多く使用されるが、本研究の中国人の結果はそうではない。Yue (2010) では、中国人本土の大学生は、親和的ユーモアの得点が最も高く (38.78点)、次いで自己高揚的ユーモア (23.17)、攻撃的ユーモア (15.81)、自虐的ユーモア (12.78) が続くことを報告している。ところが、Yue (2010) では大学生を対象としており、本研究では社会人を対象としているため、結果の直接比較を留意する必要がある。

また、なぜ中国人の自己高揚的ユーモアは日本人より高いのかについて、日本人と中国人の自尊心の文化差により解釈できるのではないかと考えられる。これまでの研究では、自尊心は自己高揚的ユーモアとの間に正の相関があることが報告されている (Martin et al., 2003; Kuiper et al., 2004; Stieger et al., 2011; Yue et al., 2014)。本研究においても、日本と中国の両方とも、自己高揚的ユーモアと自尊心の間には有意な正の相関がみられた。一方、自尊心については、これまで、中国人の自尊心は日本人よりも高いことが繰り返し報告されている (高木・黄, 1995; Yamaguchi, et al., 2007; 林, 2018)。本研究においても、同様な結果が得られた。このように、日本と中国において、自己高揚的ユーモアは、自尊心を維持するための方略として捉えられる。中国人は日本人よりも、常に高い自尊心を維持するように動機づけられていることから、より積極的に自己高揚的ユーモアを使用したがるのかもしれない。

ユーモアスタイルと承認欲求・面子欲求の関連について

ユーモアスタイルと承認欲求の関連をみると、日本では、親和的ユーモアと賞賛獲得欲求の間には正の相関、攻撃的ユーモアと拒否回避欲求の間には負の相関がみられた。一方、中国では、自己高揚的ユーモアと賞賛獲得欲求の間には正の相関がみられ、自虐的ユーモアと拒否回避欲求の間には正の相関がみられた。

これらの結果から、日本では、賞賛されたい欲求が高いほど親和的ユーモアを使用する傾向があり、拒否回避欲求が高いほど攻撃的ユーモアを使用しない傾向があることが示唆された。すなわち、親和的ユーモアの使用は周りのポジティブな評価につながるが、攻撃的ユーモアは周りのネガティブな評価につながることを示唆された。この点については、集団のハーモニーが重視される集団主義文化的文化では、集団の和を維持することに繋がる親和的ユーモアが評価されるが、集団のハーモニーを壊す恐れがある攻撃的ユーモアは評価されないと推測される。

一方、中国では、賞賛されたい欲求が高いほど自己高揚的ユーモアを使用する傾向があり、拒否回避欲求が高いほど自虐的ユーモアを使用する傾向があることが示唆された。すなわち、中国では、自己高揚的ユーモアは周りからのポジティブな評価につながり、自虐的ユーモアの使用はポジティブな評価にはつながらないものの、ネガティブな評価の回避につながるのかもしれない。

また、ユーモアスタイルと面子欲求の関連をみると、日中とも、攻撃的ユーモアと面子喪失回避の

間には正の相関がみられたことから、日本人と中国人は、面子喪失を回避する欲求が強いほど、攻撃的ユーモアをより多く使用することが示唆された。日本と中国では、攻撃的ユーモアの使用は、自分の面子を失わないように維持する方略の1つであると考えられる。一方、日本においてのみ、親和的ユーモアと面子喪失回避の間には負の相関がみられたことから、日本では、面子喪失を回避しようとする欲求が強いほど、親和的ユーモアを使用しない傾向があることが示唆された。すなわち、親和的ユーモアを使用することで、面子喪失を回避することにつながらないのかもしれない。

ユーモアスタイルと文化的自己観の関連について

ユーモアスタイルと文化的自己観の関連をみしてみる。文化的自己観には、自分を他の人々から切り離された存在と捉えるという「相互独立的自己」と、自分を本質的に周りの人々から離せない存在と捉えるという「相互協調的自己」(Markus & Kitayama, 1991)の二つのタイプがある。相互独立的自己が優勢である文化では、周りの目はそれほど気にせず、自分の内面に目を向け、ユニークな能力や才能、性格を重視しているのに対して、相互協調的自己が優勢である文化では、周りの期待や社会的役割を重視しており、他者との関わりを常に考慮し、集団の和に重きを置いている。

本研究では、日中とも攻撃的ユーモアと相互協調的自己の間には負の関連がみられたことから、集団の調和を守るには、日中とも攻撃的ユーモアを使わないようにしていることが示唆された。

また、日本では、自虐的ユーモアと相互協調的自己の間には正の相関、自己高揚的ユーモアと相互独立的自己の間には正の相関がみられたことから、日本社会では、集団の和を維持するためには、自虐的ユーモアが効果的であることが示唆された。一方、中国では、親和的ユーモアと相互協調的自己の間には正の相関、自虐的ユーモアと相互独立的自己の間には正の相関がみられたことから、中国社会では、集団の和を維持するためには、親和的ユーモアが効果的であることが示唆された。また、相互独立的自己の傾向が強いほど、自虐的ユーモアを使う傾向があることが示唆された。

ここでは、なぜ、日本では自虐的ユーモアは相互協調的自己に関連しているのに対して、中国では自虐的ユーモアと相互独立的自己と関連しているのかについて考察する。Martin et al. (2003)によれば、自虐的ユーモアは、「ユーモアを過度に自己卑下や相手を喜ばせるために使う傾向、他人のジョークのネタにされることを許容する傾向」と定義されている。日本社会では、集団の和を維持するために、常に自己卑下を行ったり、自分のことをネタにされても気にせず、周りとの関係を維持するようにつとめるのではないかと推測される。すなわち、日本では、自虐的ユーモアは集団の和を維持するために、他人のために使用されるのかもしれない。一方、中国では、自虐的ユーモアは、他人のために行うのではなく、性格のユニークさまたは心の余裕の表れとして捉えられているのかもしれない。

上述したように、日中文化において、それぞれのユーモアスタイルの使用は異なる対人的目標に関わり、異なる役割を果たしていることが推察される。

VI 結語

本稿では、ユーモアスタイルと面子欲求や承認欲求、文化的自己観などの心理的概念との関連を検討した。これまで、ユーモアスタイルについては、東洋文化と西洋文化との比較が検討されてきたが、同じ文化圏内の差異が見過ごされている。本研究では、Martin et al. (2003)が開発したユーモアスタイル尺度が日本人と中国人に適用可能であることを再確認したことで、概ね信頼性と妥当性があり、

日本人と中国人のユーモアスタイルを比較する上で一定の妥当性があることが示唆された。また、ユーモアスタイルの使用における日中間の文化差が得られた。さらに、本研究ではユーモアスタイルと面子欲求と承認欲求などとの関連を検討したことで、それぞれのユーモアスタイルの使用は異なる動機と結びついていることが示唆された。本研究の結果は、日中のユーモアスタイルについて新たな知見を提供し、日本人と中国人の円滑なコミュニケーションのためのヒントを与えることができると考えられる。

一方、本研究の限界として、ユーモアスタイルの使用を検討する際には、対人関係という要因を検討していないことが挙げられる。Sueda & Wiseman (1992) は、恥への対処行動に関する日米の比較文化研究を行い、日本人よりアメリカ人がユーモアをより頻繁に言うこと、恥の対処行動としてのユーモアは、日米いずれにおいても上下関係より同等の関係でよく用いられると報告している。また、大島 (2006) は、日本人のユーモアは家族や仲間といったウチ集団で用いられることが多いと報告している。すなわち、日本社会では、日本人はお互いをよく知ってからジョークを飛ばし合う関係になるのかもしれない。

本研究で使用したユーモアスタイル尺度の多くの項目には、「人」という単語は出ているが、例えば、「ふだんは人と一緒に笑ったり冗談を言いあったりはしない」「人がミスをしたら、よくそれをからかう」「普段、人と一緒の時、面白い話を言おうとしてもなかなか思いつかない」などにおいて、ここでの「人」は家族なのか、友人なのかは教示されていない。対象者によっては、身近な家族や親しい友人を連想して回答している人もいれば、心理的距離が少し離れた友人や同僚などを連想して回答している人もいと推測される。上述したように、相手との関係性によってユーモアを使い分けることから、日本人と中国人が、ユーモアスタイル尺度に回答する際、「人」を、具体的に「友人」か「家族」か、または「赤の他人」とイメージするかによっては、その回答が異なるかもしれない。今後、相手との親密度などの対人関係の要因を含めた更なる検討を行う必要がある。

また、本研究では、社会人のみを対象としており、サンプル数が小さく、サンプルに偏りがあることも限界として挙げられる。今後、より幅広いサンプルを対象に検討する必要がある。

引用文献

穴田義孝 (1985). 人間関係にみる日本人の国民性 政経論叢, 53(4), 1065-1104.

Bond, M. H. (1996). *Handbook of Chinese Psychology*. Oxford: Oxford University Press.

陳国海 & Martin, R. A. (2005). 应对幽默量表在 354 名中国大学生中的初步测试 中国心理卫生杂志, 5, 307-309.

陳国海 & Martin, R. A. (2007). 大学生幽默风格与精神健康关系的初步研究. 心理科学, 30(1), 219-223.

Chen, G. H., & Martin, R. A. (2007). A comparison of humor styles, coping humor, and mental health between Chinese and Canadian university students. *Humor: International Journal of Humor Research*, 20, 215-234.

陈之昭 (1988). 面子心理的理论分析与实践研究, 瞿学伟 (編著) 2006 《中国社会心理学评论 (第二辑)》, 107-160.

ゴフマン, アーヴィング (Goffman) (1967). 儀礼としての相互行為——対面行動の社会学 浅野敏夫訳 東京: 法政大学出版局.

- Hiranandani, N. A., & Yue, X. D. (2014). Humour styles, gelotophobia and self-esteem among Chinese and Indian university students. *Asian Journal of Social Psychology*, 17(4), 319-324.
- 江河海 (2000). 中国人の面子 佐藤嘉江子 (訳) はまの出版.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み. 性格心理学研究, 11(2), 86-98.
- Kazarian, S. & Martin, R. (2006). Humor styles, culture-related personality, well-being, and family adjustment among Armenians in Lebanon. *Humor: International Journal of Humor Research*, 19(4), 405-423.
- Kuiper, N. A., Grimshaw, M., Leite, C., & Kirsh, G. (2004). Humor is not always the best medicine : Specific components of sense of humor and psychological well-being. *Humor: International Journal of Humor Research*, 17, 135-168.
- Liao, C. C. (2007). One aspect of Taiwanese and American sense of humor: Attitudes toward pranks. *Journal of Humanities Research*, 2, 289-324.
- Lim, Tae Seop, (1994). Facework and interpersonal relationships. In: Ting-Toomey, Stella (Ed.), *The challenge of facework: Cross-cultural and interpersonal issues* (pp. 209-229). SUNY Press.
- 林萍萍 (2018). 面子喪失に関する日中比較—日中大学生の質問紙調査を基に— 国際文化学, 31, 152-167.
- 林萍萍 (2018). 面子行為に関する日中比較 博士論文.
- 林萍萍 (2019). 面子回復行為に関する日中比較—日中大学生を対象に— 第27回感情心理学会.
- 林萍萍 (2020). 面子の共有に関する日中比較—日中大学生の質問紙調査を基に— 中国 21= China 21, 52, 165-190.
- 林萍萍 (2022). 面子維持に関する日中比較—質問紙調査を基に— 国際文化学, 35, 282-303.
- Lin, Y. (1936). *My country and my people*. The John Day Company.
- 牧野幸志 (1997). ユーモア行動の構造に関する研究 広島教育大学教育学部紀要 第一部 (心理学), 46, 41-48.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological review*, 98(2), 224-253.
- Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the Humor Styles Questionnaire. *Journal of research in personality*, 37(1), 48-75.
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor*. MA: Elsevier Academic Press.
(R. A. マーティン 丸野俊一ら監訳 2011 ユーモア心理学ハンドブック 北大路書房)
- Martin, R. A., Ford, T. (2018). *The Psychology of Humor: An Integrative Approach*. Burlington, MA: Elsevier Academic Press.
- 大島希巳江 (2006). 日本の笑いと世界のユーモア—異文化コミュニケーションの観点から— 世界思想社.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton university press.
- Schermer, J.A., Rogoza, R., Kwiatkowska, M.M. et al. (2019). Humor styles across 28 countries. *Current Psychology*. <https://doi.org/10.1007/s12144-019-00552-y>

- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, 59-73.
- Singelis, T. M. (1994). The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and social psychology bulletin*, 20(5), 580-591.
- Smith, A. H. (1894). *The Chinese characteristics*. New York: Flming H. Revell.
- Stieger, S., Formann, A. K., & Burger, C. (2011). Humor styles and their relationship to explicit and implicit self-esteem. *Personality and Individual Differences*, 50(5), 747-750.
- Sueda, K. and R.L. Wiseman (1992). Embarrassment Remediation in Japan and the United States, *International Journal of Intercultural Relations*, 16: 159-173.
- 末田清子 (1998). 中国人学生と日本人学生の「面子」の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較の一事例研究 *社会心理学研究*, 13(2), 103-111.
- 高木秀明・黄毓芳 (1995). 日中青年の自己意識, 対人態度, 親子関係に関する比較研究 *横浜国立大学教育紀要*, 35, 1-18.
- 上野行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類について *社会心理学研究*, 7(2), 112-120.
- Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., ... & Krendl, A. (2007). Apparent universality of positive implicit self-esteem. *Psychological Science*, 18(6), 498-500.
- 吉田昂平 (2012). 日本語版ユーモアスタイル質問紙の作成. *笑い学研究*, 19, 56-66.
- Yue, X. D. (2010). Exploration of Chinese humor: Historical review, empirical findings, and critical reflections. *Humor: International Journal of Humor Research*, 23(3), 403-420.
- 岳曉東, 郝霞, & Giovanna Goldman.(2010). 幽默風格、樂觀人格與心理健康——800名香港和內地大專學生的調查與思考 *教育研究學報*, 25(1), 125-157.
- Yue, X. D. (2011). The Chinese ambivalence to humor: Views from undergraduates in Hong Kong and China. *Humor: International Journal of Humor Research*, 24(4), 463-480.
- Yue, X. D., Liu, K. W. Y., Jiang, F., & Hiranandani, N. A. (2014). Humor styles, self-esteem, and subjective happiness. *Psychological reports*, 115(2), 517-525.
- Yue, X. D., Leung, C. L., & Hiranandani, N. A. (2016). Adult playfulness, humor styles, and subjective happiness. *Psychological Reports*, 119(3), 630-640.
- Zhang, X. A., Cao, Q., & Grigoriou, N. (2011). Consciousness of social face: The development and validation of a scale measuring desire to gain face versus fear of losing face. *The Journal of social psychology*, 151(2), 129-149.
- 赵卓嘉 (2013). 由“面子”衍生的若干近似概念的辨析 *社会心理科学*, (1), 84-93.